

小川作小屋村運営協議会（宮崎県西米良村）

～自立自走の集落づくり～

## 平成の桃源郷を目指して

小川作小屋村運営協議会  
会長

かみめら ひでとし  
上米良 秀俊



### 1. 西米良村の概要

西米良村は、宮崎県の中央部最西端、九州中央山地のほぼ中央部の熊本県境に位置し、村の中央部を清流一ツ瀬川が流れ、総面積 271.56 平方キロメートルの約 96%を森林が占める豊かな自然環境に恵まれた村であります。人口約 1,200 名、高齢化率 41%と人口は県下で一番少なく、高齢化率は県下で 2 番目に高い状況であり、典型的な過疎・高齢化に悩む中山間地域でもあります。そのような中、平成 10 年度より開始した全国初の「国内版ワーキングホリデー」制度など交流人口対策を軸においた様々な事業を推進し、年間 14 万人の観光客が訪れる村となりましたが、その後直面した「平成の大合併」においては、住民の強い要望もあって、合併せずに自立自走の道を選び、村民一丸となり、村で暮らす老若男女が生き生きと独自の幸福感を持ち、生涯現役で元気に生きる村づくりを目指す「平成の桃源郷」づくりに取り組んでいます。

### 2. 活動開始の背景・経緯

「平成の桃源郷」づくりの当初の舞台として、自立自走の集落経営を目指すモデル地域に、当時、71%と村内で最も高い高齢化率であった小川地区に焦点をあて、村と地域住民が協働で事業に取り組みました。

小川地区は、昔、西米良を含む米良領の中心地でしたが、過疎・高齢化により集落の存続も危ぶまれるような状況の中、これまで地域を守ってきた先人のためにも「座して死を待つわけにはいかない」との地域住民の熱い思いから、平成 12 年には地域資源を活用したイベント「カリコポーズの山菜まつり」を開始しました。当初、500 名程度の来場者でしたが、地域住民を中心に出身者等にもイベントに参加してもらいながら、現在、1 日で 1,000 名程度が来場す

るイベントとして継続しています。

村内で最も高い高齢化率でありながら、そのような住民主体の取り組みの基盤もあり、小川地区の住民に対して「平成の桃源郷 おがわ作小屋村づくり」事業の提案がありました。「本当に自分達がやれるのか?」「こんな地区に毎日お客さんが訪れるのか?」など住民の不安はつきませんでした。しかし、「小川地区の将来のため、地区住民協力して頑張ろう」という地域リーダーである自治公民館長の旗振りのもと、事業に取り組むことを住民一致で決定し、平成 19 年 3 月に地域住民と行政とが共同で「小川作小屋村設立準備委員会」を設立し、事業を開始しました。

### 3. 準備委員会の取り組み

準備委員会では、運営組織の検討や新たに地域に建設される茅葺の食堂、加工所などの平面プランの運用プランの検討、景観研修、料理メニュー検討など運営に係る実行委員会のほか、視察研修、景観講習会などの含め 2 年間で約 90 回に及ぶ作業を行いながら、準備を進めました。また茅葺等の新設施設については村で整備する計画でしたが、実際に運営を行う地域住民も自分達の施設として愛着と責任感を持つため、施設に使用する茅を自分達で調達する計画としました。

茅集め作業については、住民を中心に地域外のボランティアも募り、1 年目に茅場の整備、2 年目に刈り取り、束ね作業を行い、この間、延べ 200 名の地域住民、ボランティアスタッフの参加がありました。また作業に参加できない高齢者の方々には、茅を束ねるロープ作り作業をお願いするなど、住民総参加で新たな施設の建設に関わっていきました。

準備委員会の活動を通じ、それぞれがこれから始まる取り組みに対する地域の機運を高めました。



茅の集束作業

### 4. オープン後の取り組み

準備委員会での作業を経て、平成 21 年 2 月に地域住民が主体となった「小川作小屋村運営協議会」を設立しました。設立後、既に地域内に整備されていた公の施設の指定管理者として運営を開始しながら、最終的な準備をすすめ、平成 21 年 10 月に集落経営・交流拠点施設「おがわ作小屋村」がオープンしました。

「おがわ作小屋村」の食堂では、地元の食材にこだわったおばちゃん達で作る地元の惣菜料理をメインとしていましたが、この地域の特徴を出すため、盛り付けに趣向を凝し、16 枚の小皿に少量の料理をちりばめた形式の「おがわ四季御膳」を中心に提供しました。来場者が本当にあるのか疑心暗鬼でしたので、当初、料理に用いる食器類も数多くは準備していませんでしたが、オープン後、大勢のお客様がお見えになる状況に慌て、すぐに食器を追加で揃え、昼間だけの営業で、多いときは 1 日 100 食の「おがわ四季御膳」を提供するようになりました。

この「おがわ四季御膳」は、見た目にも楽しいので、注文されたお客様のほとんどが食べる前に写真を撮られ、それがロコミとなって、また新たなお客様を呼び込むようになり、まさに「おがわ作小屋村」の顔となっています。急峻な山々に囲まれ耕作地が極端に少ない西米良村において、地元産の食材のみを安定して供給することやそれを使用した料理を

提供することに対する不安材料の一つでしたが、一つの料理を少量多品目で構成し、かつ旬の地元産食材を毎月入れ替えるという方式をとったことで、これらの懸念は大幅に解消され、結果、お客様にも喜ばれるという良い結果を生みました。また提供し始めてから気づいた点としては、一皿ずつの量が少ないため、ほとんど食べ残しがなく一日 100 食を提供した日でも小さいバケツ半分くらいしか残渣がでないというメリットもありました。もちろん、おばさんたちの作る料理の味が良いというのは、たくさんのお客様から声をいただきましたから、食べ残しが少ない最大の理由はそこにあると思います。

その料理を作るなど運営の中心となるのは、平均年齢 68 歳になる 13 名の地元のおばさん方と U ターンした 20 歳代の小川出身の青年、I ターンした 20 歳代男性と 30 歳代の女性です。そこに、日頃から地域の方々も食堂の運営を色々ときかけ、時期になると食材を作付けしてくれたり、旬の食材を採ってきてくれたり、また自分たちで食べる分のお米まで「作小屋村を訪れるお客さんへ」と提供してもらったりと、地域全体で施設を支えています。

運営を開始し、まる 4 年が経過しましたが、昨年度の決算では、年間レジ客数が 27,000 人、年間売り上げが約 2,700 万円、そのうち地域の方々の給料や物産品の委託販売、食材の仕入れ等で地域へ還元された金額は約 1,800 万円となり、「おがわ作小屋村」は地域の人々同士、地域と域外の人々を繋ぐ交流の拠点になっているとともに、集落経営の拠点として、所期の目的の第 1 段階を達成しつつあります。



16 枚の小皿料理「おがわ四季御膳」

## 5. 景観づくりへの取り組み

オープンと同時に取り組んだ事業として地域の伝統芸能とロケーションを活用したイベント「月の神楽」と、地域の新たな魅力となる景観を作る「おがわ花見山」づくりがあります。

小川地区にはコノハナサクヤヒメの姉にあたるイワナガヒメを御祭神として祀る米良神社があり、夜神楽が郷土芸能として伝承されています。この神楽と街灯など人工的な明かりがほとんどないという状況を逆手にとり、中秋の名月の灯りだけで、伝統の神楽を楽しんでもらおうと本協議会で企画・運営した初のイベントが「月の神楽」です。

夜のイベントのため、どのくらいの来場者があるか見当もつきませんが、2 年目には地域住民にも協力してもらいながら、竹灯籠づくりを行うなど会場の雰囲気ステップアップさせながら、現在では 300 名ほどの方々がこのイベントを目指して来場されます。



「月の神楽」

また準備委員会で検討した景観づくりの一環として、福島県の花見山をイメージした山を当地区にも整備しようとする「おがわ花見山づくり構想」を計画。小川地区で所有していた施設前の山林を提供してもらい、平成 22 年 3 月に第 1 回の植樹祭を開催。約 100 名の地元住民とボランティア参加者によりヤマザクラやミツマタ、モミジなど地元で自生する花木を中心に多種多様な花木の植栽を行っています。これまでに 4 回の植樹祭を行い、高木・低木を含め約 7,000 本

の花木の植栽を行い、これらの花木に花がつくのを楽しみ整備を続けています。



「おがわ花見山」完成イメージCG

## 6. 課題と展望

地域住民を中心とした小川作小屋村運営協議会の活動により、平成 24 年度末の高齢化率は 65.5%と事業開始前に比較し 6%減少したほか、本協議会では 4 年間で小川地区に U I ターンした若者 3 名を雇用しています。また前述したとおり、交流人口の増加、地域内への経済波及効果なども見られ、事業の第 1 段階としては、多くの成果を地域にもたらすとともに、地域住民の結束力の高まりや地域外の他団体との連携も図られてきました。しかしながら、少子高齢化は依然として厳しい状況にあり、今後、経営基盤の強化や人材、マンパワーの確保など課題は山積しており、特に調理で活躍している地元のおばさん方のこの地域の「味」を次世代に引き継ぐことは喫緊の課題であります。これらの課題については、協議会長を中心に検討をすすめ、現在、積極的に U I ターン者を受け入れマンパワーを確保しながら、一緒に地域の味を伝承していくなど、次のステップに向けた取り組みも開始しています。人口 100 名足らずの地区ですが、「自立自走・持続可能」な集落経営のモデルケースとして、ここから新たな中山間地域の活性化の方策を発信し小川地区の未来を築くため、小川作小屋村運営協議会の活動は始まったばかりです。



「おがわ作小屋村」スタッフ